

「びわほなみ」における後期重点施肥技術のすすめ

● 後期重点施肥技術とは？

- 1 基肥を減量して初期生育を抑制する
- 2 茎立期頃(主茎長2cm)の穂肥を大幅に増量して穂数を増加させる

● 従来の施肥技術との違いは？

【従来の施肥技術の考え方】

播種時の基肥を多く施用し、本格的な冬を迎える前に生育量を増加させる
追肥・穂肥・実肥により栄養を維持し、穂数を確保する

【従来の施肥技術における課題】

暖冬年では前半の生育が過剰になり、無効分げつの増加や病害が発生
加えて、生育後半の栄養凋落により、収量・品質が低下

後期重点施肥技術では、基肥を減らして意図的に初期生育を抑制するため、
秋季～冬季の気象による影響が生じにくく、安定して収量・品質を確保できる

● 施肥量と施肥時期の目安

穂肥一括施用の場合

基肥	穂肥	実肥
播種時	茎立期(2月下旬頃)	開花期(4月下旬頃)
2kgN/10a 例:化成肥料 488 15kg/10a	14～18kgN/10a 例:尿素 30～40kg/10a	4kgN/10a 例:尿素 10kg/10a

穂肥2回分施の場合

基肥	穂肥1回目	穂肥2回目	実肥
播種時	2月中旬頃	3月中旬頃	開花期(4月下旬頃)
2kgN/10a 例:化成肥料 488 15kg/10a	7～9kgN/10a 例:尿素 15～20kg/10a	7～9kgN/10a 例:尿素 15～20kg/10a	4kgN/10a 例:尿素 10kg/10a

● 技術導入のメリット

- ☆従来の施肥技術と比べて、無効分げつが減少し、穂数が増加することで、
収量の増加が期待できる
- ☆播種時の施肥量が少ないため、肥料補給時間の短縮や作業人員が削減できる
➡1日あたりの作業可能面積が増加し、適期に播種できる面積が増加する
- ☆穂肥に単肥(尿素や硫安)を用いることで、全量基肥肥料(緩効性肥料)を用いた施肥体系と比べて、肥料コストを節減できる

● 注意点と対策

- ★出穂期や成熟期が数日遅れることがある
- ★降雨や降雪によって、想定している時期に穂肥が施用できないことがある
対策 施用が大幅に遅れると分げつ不足となるため、前倒しして施用する
ただし、後半の栄養凋落につながるため、1月中の施用は避ける
- ★穂肥2回分施の場合、穂肥2回目時点では節間が一定伸長しているため、
トラクターを用いて散布すると、接地圧で麦の損傷が大きくなることもある
対策 トラクターを用いる場合は一括施用とする
または、2回分施の2回目の散布は背負い式の動散などを用いる
- ★基肥を減量して初期生育を抑制するため、雑草との競合に負けて、
雑草の発生量が多くなることもある
対策 播種前に排水対策を実施して土壌を乾かし、丁寧な耕起を行うことで、
除草剤の効果を安定させる
- ★高地力や基肥の過剰施用などにより穂肥前の生育量が極端に旺盛な場合、
穂肥により節間が過剰に伸長し、倒伏程度が大きくなることもある
対策 穂肥前の生育が過剰な場合は穂肥量を減量する
翌作以降は基肥の減量や播種時期を遅らせるなどを検討する

★基肥無施用や低温、湿害などにより穂肥前の生育量が極端に劣る場合、
穂肥の吸収効率が低下し、分けつ不足により収量が低下することがある

対策 初めて実施する圃場では基肥施用を基本とする

● 具体的な取組事例

【農事組合法人 A(栗東地区)】

- ◆「びわほなみ」の栽培開始をきっかけに後期重点施肥技術に取り組み
- ◆複数年の状況を勘案し、基肥を施用せず、播種作業を効率化
- ◆穂肥はブロードキャストで尿素 40kg/10a を一括散布
トラクターはセミクローラタイプを使用し、接地圧を軽減
さらに、倍速ターン機能をオフにすることで、旋回時の麦の損傷を軽減
- ◆穂肥時の土壌水分が高い場合は、旋回せずに前進＋後進で散布
- ◆明渠にも肥料が落ちるため、明渠内の雑草が繁茂することが課題
- ◆R7 年産の取組状況 面積約13ha 播種11/5～15 穂肥散布2/4、6、7



穂肥散布の様子



穂肥散布直後の轍



損傷した麦(軽度)



明渠に落ちた肥料

【個別経営体 B さん(中主地区)】

- ◆「びわほなみ」転換前の品種から5年程度後期重点施肥技術に取り組み
取組当初は尿素の価格も現在より安く、肥料コストが大きく節減できた
- ◆穂肥は2回分施とし、背負い式の動散で尿素20kg/10a ずつ散布
- ◆R7 年産の取組状況 面積約 70a 播種11/初旬 穂肥散布2/9と3/中旬



穂肥散布時期の麦の生育

【個別経営体 C さん(野洲地区)】

- ◆「びわほなみ」の栽培開始をきっかけに後期重点施肥技術に取り組み
- ◆初年目に基肥無施用としたが、湿害等で発芽不良や生育不良が発生
穂肥により雑草の生育が旺盛となり、雑草害による減収も生じた
- ◆2年目は基肥を化成肥料 488 で 40kg/10a 施用(暦よりも増量)し、
初期生育を確保
- ◆穂肥はブロードキャスタで尿素 30kg/10a を一括散布
基肥を増量したため、倒伏のリスクがあることから、穂肥量は控えめに施用
- ◆R7年産の取組状況 面積約6ha 播種11/8～15 穂肥散布2/15～



穂肥散布の様子



穂肥散布時の麦の生育

【農事組合法人 D(守山地区)】

- ◆「びわほなみ」転換前の品種から後期重点施肥技術に取り組み
- ◆穂肥は2回分施とし、1回目はブロードキャスタで尿素20kg/10a 散布、
2回目は背負い式動散で尿素10kg/10a 散布
- ◆降雨等で圃場条件が悪い場合は1回目も動散を使用
- ◆穂肥散布の手間(労務費)は増加するが、肥料費は7000円/10a 程度節減、
トータルでは6000円/10a 以上経費を節減できる計算(R5 年産での試算)
- ◆R7 年産の取組状況 面積約4ha 播種 11/7～10 穂肥散布2/20



穂肥散布時の麦の生育